
追憶の標

barth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶の標

【Nコード】

N2407F

【作者名】

barth

【あらすじ】

目が覚めた時、彼は記憶を失っていた。過去の自分を思い返す為、彼は昔の日記を見返す事にする。果たして自分の知らない自分とはどんな人間だったのか、手掛かりを求め頁を開く。百パーセントギヤグの短編ストーリー。

(前書き)

感想、評価、質問等、頂けたら嬉しい限りです。気軽に書き込んでやって下さいな。

「お、あったあった」

そう言った俺の両手には、古臭い埃まみれの本が握られていた。いかにも子供が好みそうな絵と、それに被るようにでかどかど書かれた文字。

『なつやすみのえにつき』

「はあ、それにしてもこんな古いのしかないのかよ」
思わずぼやく。

どうしてこんな事になったのか。俺は改めて考えてみる。
目が覚めたら、知らない部屋の中だった。

ここは何処だろうと考え、知った。

自分の記憶が無い事を。

今までで分かった事と言えば、あの場所が病院で、俺はどっかで頭でも打つたらしく記憶が無く、親族は現在連絡が取れず、大した怪我は無いという事。

幸いにも日常生活に必要な事はすっかり覚えていたから、ついさつき病院で俺の住所を聞いて退院してきた。

医者が言うには、運が良ければそのうち記憶も戻るだろう、との事。

まあ、そんな訳なんだが、なんとももどかしいので昔の日記なんかを読んだら何かの足しになるのでは、と考えた次第だ。

さて、せっかく目的の物を見つけたと言うのにいつまでもぼーっと考え事にふけるのもなんなので、俺は古臭い日記帳に意識を向け、やぶらないよう気を付けながら丁寧に読み始めた。

『八月六日（あめ）』

きょうからにつきをつけることになった。がんばろう。』

目に入って来たたどたどしい文字で書かれた内容に、思わず頬が緩む。

「へえ、俺ってこんな字だったのか」

懐かしさなどは微塵も感じないが、いかにも子供らしい字を何とも微笑ましく思いながら、頁を進める。

『八月七日（くもり）』

きょうはともだちとつら山であそんだ。』

「ふむふむ……う？」

ふと、視界に映った絵に俺は疑問を覚えた。

「おい、なんで山なのに緑じゃなくて赤ばかりなんだ？」

クレヨンでぐちゃぐちゃと塗り潰されている色は、赤一色と言っても良い。

不思議に思い更に文を読み進めると、

『かずくんがひみつきちをつくるうっていったから、大きな木をさがして』

「ほうほう」

『モヤシタ』

「何故に！？ つーかいきなり片言ですか！？」

『あかい火がきれいだった。おわり。』

「ちよつと待て！ 秘密基地はどうした！？」

何だこれは、いや、何だ俺は。何故に秘密基地を作ろうとして手ごろな木に放火かましてんだよ。

しかも燃やして終わりかい。

いや、まあ、子供だし、突飛な行動に至る事もあるかもしれないが……

頭に次々と浮かんで来る様々な意見と疑問を無理矢理ねじ伏せ、

俺は頁をめくった。

『八月八日（はれ）』

きょうテレビできのうつらやまがかじになったといっていた。火はこわいとおもった。』

「消さずに帰ったのかよ！！ 明らかにお前が犯人だよ！！」

なんつー恐ろしい事しやがるんだ昔の俺は。

『あと、おかあさんにおつかいをたのまれた。おにくとたまご。』
「さりと話題変えやがったなこいつ」

『おにくはかみついたりひつかいたりするから、きらい。』

「お使い!? 明らかに現地調達じゃねえか!? 何させてんだよ母さん!」

一瞬、親の正気を疑った俺だが、その考えは次の文を読んだ瞬間に爆散した。

『でもおつかいのおかあさんがくれるおかねってなんだろう。おわり。』

「こいつだ! おかしいのはこいつだ!! と言つか母さんも察してくれ!! 色々気付く要因はあっただろう!!」

日記を読み進めるごとに、俺と言う人間が分からなくなっていく。次はどんな奇行が飛び出すのかと、俺は変な覚悟を覚えながら頁をめくった。

『八月九日 (はれ)』

きょうはみなでおとしあなをほった。』

「……こいつが作る落とし穴か。考えたくもないな」

既に昔の俺に対する認識は変以外の何者でもない。

『まじめなよしおくんがおちた。』

「かわいそうに、よしおくとやら」

『でてきたらくるかったかみがきいろになっててないふをもっていた。こわかった。おわり。』

「墮とし穴!? 違う、それは違うぞ俺! 決して落とし穴の『落とす』は墮落させると言う意味じゃあ無い!! っつかどんな構造だよそれ!」

一体何をどうやってたらそんなものが作れると言っただろうか。果てしなく謎だ。

考えれば考える程ドツボにはまりそうなので、俺はなかば投げやり疑問を封殺して頁をめくる。

『八月十日 (くもり)』

きょうはテレビでよしおくんのいえがうつっていた。よしおくんのおとうさんが、けがでにゅういんしたんだっておかあさんがおしえてくれた。でも、テレビのおじさんがいったみせいねんのげきかってなんだろう。』

「よしおくん！？ やっちゃったのか！？ そうなのか！？」

『よしおくんはけがしてないかしんぱいだった。おわり。』

「怪我よりよっぽど悲惨な事になつとるわ！！ 主にお前のせいではない！！」

今現在よしおくんがどうなっているかを知る術は無いが、とりあえず俺はできうる限り謝罪の念を彼に送ってから頁を進める事にした。

『八月十一日（はれ）』

きょうはおまつりだった。』

「……で、何したんだこいつは」

もはや過去の俺に常識など求めはしない。

それどころか、無意識に俺の脳がこれを自分の過去と言う事実さえ蓋をし、全くの別人の行動を見ているのだと軽い自己暗示をかけようと試みている始末だ。かなり末期だなマイブレイン。

とにかく、もう滅多な事では驚かないぞ。

揺るがない自信と共に、俺は文を読み進める。

『はなびがすごかった。』

「なんだ、意外と普通？ いやいや」

『いかやきとわたあめおいしかった。でも、きんぎよがとれなくてすごくくやしかった。おわり。』

「あん？ほんとに何も無いのかよ」

準備した途端に肩透かしをくらい、何とも嫌な気分が胸中を巡った。

絵も普通の花火だし。何なんだこいつは。

どれほどいろんな見方をしようとも普通以外の何物でもない頁をしばし睨むが、諦めて俺はようやく先に進む。

『八月十二日（はれ）』

きのうのにつきのえをおかさんにみしてあげた。』

「……へえ」

何ともいきなり普通の内容に切り替わってしまい、僅かに落胆する自分が、いる？

いや！ そんな事は断じて無い！！

普通万歳と脳内で反芻しながら、俺は日記に再び目を落とす。

『おかあさんに、

「きれいなはなびね。」っていわれた。でもぼくがかいたのははなびじゃなくて、はらわたをぶちま

俺は日記を閉じた。

「盲点だった。そうか。そういう事か。どつりで花火らしき物が赤一色のはずだよなあおい」

恐らく、八つ当たりしたに違いない。

考えが至ると同時に、つい俺の口から心中の言葉が漏れた。

「俺、今のまがいい。と言うか、世の中の為にもその方がいいな。うん、確実に」

今この瞬間、はつきりと決意した俺は、二度と見る事は無いであろう日記帳を押し入れの奥にしまふ。と言うより投げ込む。

全力で。

「さて、寝るか」

色々と消耗した俺は、力の無い眩きを共に倒れ込むようにベッドに伏した。

これからは平和に生きよう。うん、そうしよう。

「……記憶が戻りませんよーに」

誰にでもなく自分に言い聞かせ、俺は眠りへと落ちていった。

この先どうなるかは、それこそ、神のみぞ知る、と言う所だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407f/>

追憶の標

2010年10月8日15時21分発行